

あかいけ

1

希望の花籠

あなたの願いを飾ってみたい

2004 福岡県シニア美術展工芸の部で最優秀賞（福岡県知事賞）を2年連続受賞した井上敦夫さん（生力）の作品。手前が昨年受賞した「希望の花籠」。奥が一昨年受賞し全国展で銀賞を受賞した「花壺」。

2005年が皆さんにとって希望に満ちた一年でありますように…（井上さん宅の庭で撮影。詳細記事は4～5ページに掲載しています）

年頭の ごあいさつ

2005



赤池町長職務代理者
赤池町助役 今田 一成



赤池町議会議長
片岡 文雄

新年明けましておめでとうございます。明るい希望に満ちた新春をご家族おそろいでお迎えのことと心からお慶び申し上げます。

さて、昨年の我が国の世相を表す漢字「文字」に「災」が選ばれ、清水寺貫主により特大の色紙に揮ごうされました。観測史上最多の10個が上陸した台風、新潟県の中越地震、イラクでの人質殺害など多くの天災、人災が生じました。

一方、景気経済の落ち込み、増大する財政赤字、悪化している雇用関係、過疎化、少子高齢化の進行、三位一体の改革と呼ばれる財政システムの改革など、大変厳しいものであります。

また、赤池町では二〇〇二年に財政再建団体から脱却し、第三次赤池町総合計画に準じて、総合保健施設「コスモス」の建設に着工いたしました。しかし、工事発注に関し、大きな問題を残すことになりました。町民の皆様には心からお詫び申し上げますとともに、二度と再びこのようなことのないよう「克己復礼」を旨として、粉砕身、町行政に徹してまいります。

また、赤池町・金田町・方城町の三町合併については、合併関連議案が各町議会で可決され、12月1日には麻生福岡県知事に三町の合併申請書を提出し、受理されたところであります。

合併までにはまだ厳しい過程が予想されますが、小異を大事にした地域重視型の分権分散型の「福智町」（平成18年3月6日）に向け、肅々と取り組んでまいります。いずれにしても十七年度は「災い転じて福となす」ために、職員の資質、能力の向上を図ることはもとより「刻苦勉励」に努め、行財政運営の効率化を図るために、歳出の抑制を図ると共に、税收の確保、受益者負担の適正化等、財源の確保に努めることにより、財政の健全化を進めながら、経済の動向に即応した機動的、弾力的な運営に配慮しつつ、節度ある町政運営に努めてまいりますことをお約束して、年頭のあいさついたします。

皆様におかれましては、輝かしい新春をすこやかに迎えのことと心よりお慶び申し上げます。

さて、赤池町議会は昨年11月に赤池町・金田町・方城町の合併議案を慎重に審議し、可決いたしました。三町議会議長立ち会いのもと、12月1日に県知事への合併申請が行われたところであります。

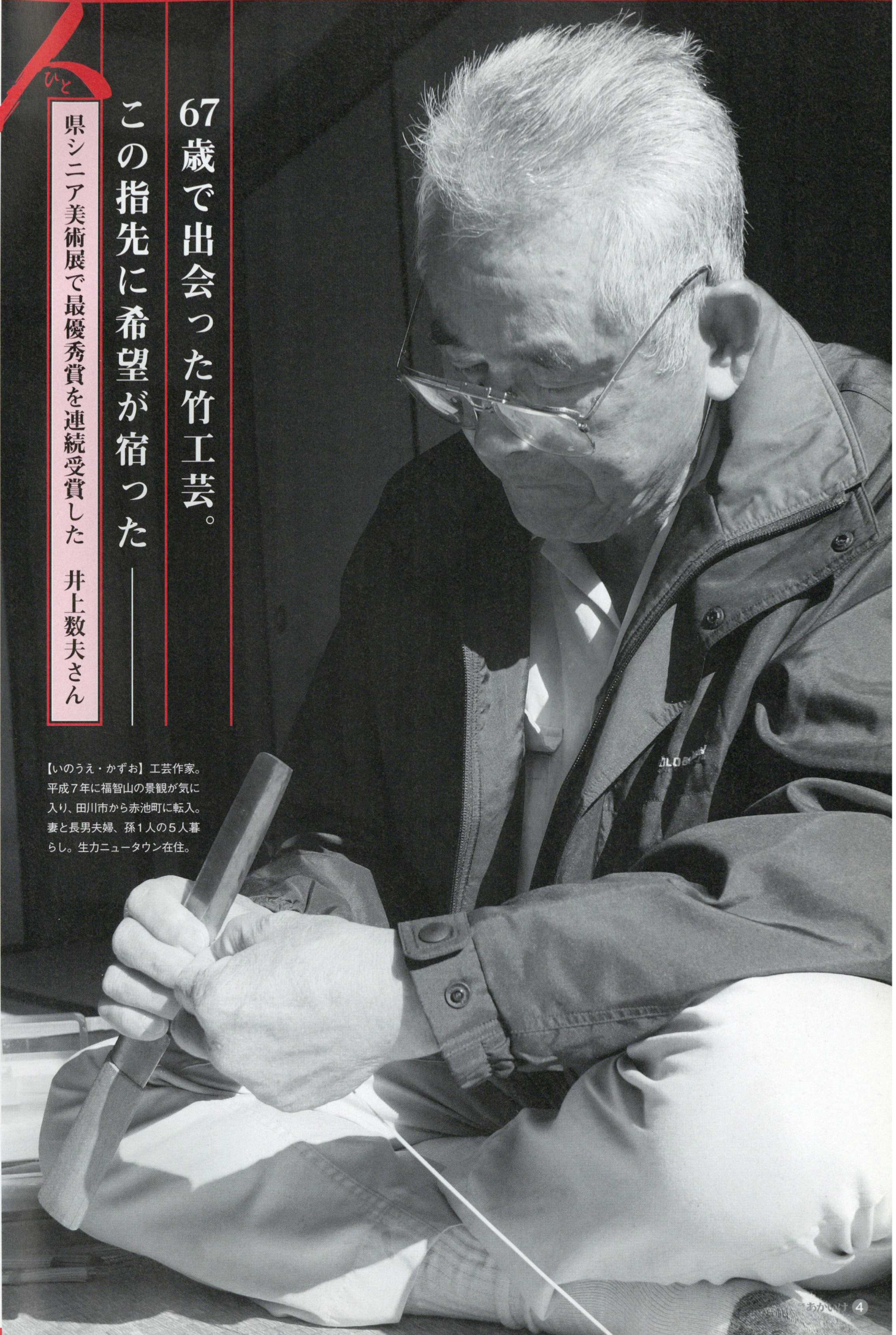
私は、町づくりにおいては何よりも「展望」が不可欠だと考えます。10年先、20年先を見据え、子どもたちに誇るべき町をつなぐという責務が、私たちに課せられていると痛感しています。三位一体の改革が進むなか、全国的に合併の経緯を見ますと、やはり苦心の末に大きな「展望」を選択しています。小異を捨て大同をとらなければ、10年先はおろか、数年で展望の持てない町づくりを強いられることとなります。そのことを熟慮した上での決断であります。さらに申し上げるなら「木を見て森を見ず」ということわざに例えたとき「木」は財政であり、「森」はまちの将来像にあたります。合併を考えたとき、木と森の双方を認識し、確かで豊かな展望のある将来像を住民の皆様と共に作り上げる必要があります。そのためにも私たちは現状と未来を見据え、町議会の重責を果たすために、誠心誠意、鋭意努力する所存でございます。新春の門出にあたり、皆様のご健勝とご多幸を祈念し、謹んで年頭のごあいさつを申し上げます。

謹賀新年

赤池町議会

順不同敬称略

- | | | | |
|-------|-------|-------|-------|
| 副議長 | 池田 兼善 | 田中 久夫 | 久富 信義 |
| 木村 幸治 | 今野 正一 | 大島 勇夫 | |
| 立花 義廣 | 小松 照文 | 小松 春義 | |
| 白石二三市 | 木村 正史 | 安永 榮一 | |
| 皆川 高司 | 奥野サカエ | 日高 進 | |

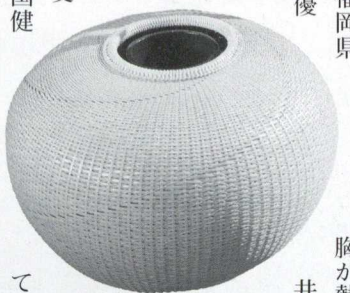


ひと
県シニア美術展で最優秀賞を連続受賞した 井上数夫さん

67歳で出会った竹工芸。
この指先に希望が宿った

【いのうえ・かずお】 工芸作家。平成7年に福智山の景観が気に入り、田川市から赤池町に転入。妻と長男夫婦、孫1人の5人暮らし。生力ニュータウン在住。

やわらかな陽ざしが指先を照らすように注いでいました。井上数夫さん、72歳。工房を兼ねた自宅の座敷の一角で緻密な作業が進んでいきます。竹工芸を始めて3年目を迎えた平成15年、福岡県シニア美術展工芸部門で最優秀賞の福岡県知事賞を受賞。続けて昨年も県知事賞を連続受賞し、11月30日に北九州市で表彰を受けました。



井上さんにとって昨年は特別な一年でした。一昨年受賞した「花壺」が第17回全国健康福祉祭の美術展（群馬県）に福岡県から推薦され銀賞に。プロでも難しいと言われる西部工芸展にも入選。そして、とびうめ国文祭美術展工芸で入選するなど、初出品にもかかわらず数々の展覧会

で高い評価を受けたのです。「まったく予想してなかった賞でしたから、飛び上がるほどうれしかったです」と井上さん。全国展銀賞の結果を聞き、胸が熱くなったと言います。井上さんの竹工芸との出会いは平成12年、大分県本耶馬溪町の道の駅「耶馬トピア」で竹工芸作品を偶然目にしたのがきっかけです。工芸体験で小出健吾先生に指導を受け、竹の魅力に引き込まれていきました。月に3回、耶馬

溪まで片道63kmを通い、昨年6月から独自の創作をするようになりました。井上さんは20代で大工を経験し、三井鉱山に就職。三井建設を経て55歳で定年退職しました。退職後も10年間、大工や

▼1mmの竹をさらに半分に割く。竹を細く切って削る籠（ひご）は、縦籠、横籠、掛籠などがあり、これらを組み上げて竹工芸が完成する。特に掛籠は幅0.5mm、厚さ0.3mmという驚くべき細さだ。◀一昨年に福岡県シニア美術展工芸部門で福岡県知事賞を受賞し、全国健康福祉祭の美術展で銀賞を受賞した「花壺」（写真左）



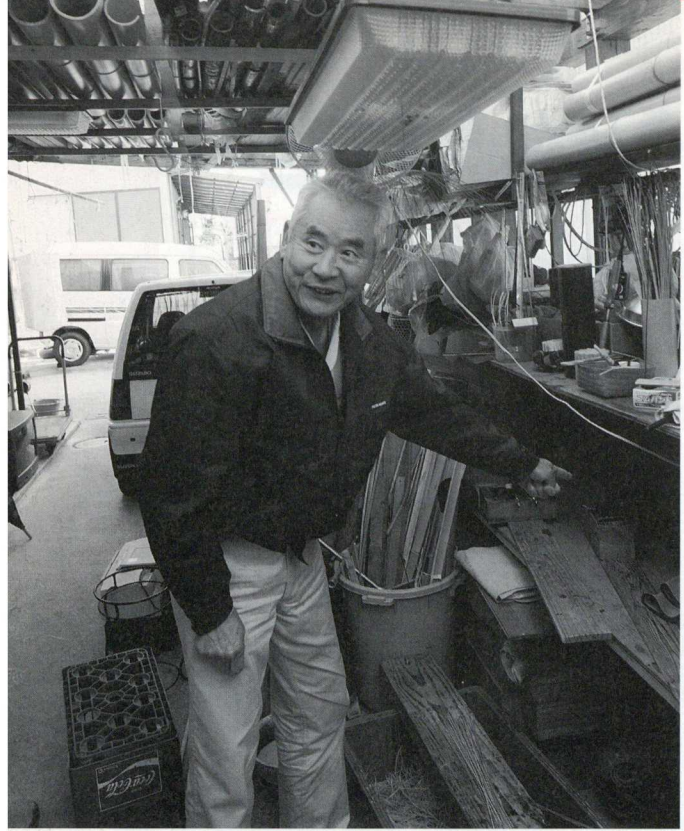
植木職人として活躍。工具の使い方や手入れ、木の特性を理解していたこと、手先の器用さ、それらが上達の早さにつながり、初出品での受賞に結びつきました。作品の造形を考えるのは朝と夜。朝は6kmの散歩道で、夜は床の中で：ひらめいたことを書き写すメモ用紙と鉛筆は、就寝時も常に手の届くところにあります。「造形が思い浮かんだら、早く作ってみたいと思うんです。あれやこれや試行錯誤して、イメージどおりにできたときの達成感は、たまらないですね」。



今までハイキング、植木、盆栽、釣り、絵、習字、写真など趣味がなくて困るということはなかったと言います。井上さんは竹工芸に没頭する日々を送っています。

「認められると製作に張りがあります。希望があると人生に張りがあります。銀賞に輝いた全国展で、次は金賞と銅賞をそろえたい。西部工芸展でも入賞したいですね」とおだやかな表情で夢を語ります。「真っ白な籠だから、これから、いろんな色がのせられる…」そんな想いを込めて、昨年受賞した作品に「希望の花籠」と名付けました。井上さんは孫の大樹さんに語りかけます。

「1日、24時間は短いよ。勉強して地球の回転をもう少し遅くできないものかね」と。そして今日も井上さんは、指先に神経を集中させ、籠を組んでいきます。67歳で出会った竹工芸。自らの希望を紡ぐかのように、ゆつくりと、そして着実に：



▲自宅の車庫がいつしか材料の保管場所に。竹は杷木町まで買い付けに行き、ここで井上さんの手で丁寧に加工される。▶昨年受賞した「希望の花籠」（写真右）千鳥編みと呼ばれる繊細な作品。通常は滑り止め効果や柔軟性を高めるため皮をはいた竹を使うが、この作品は光沢ある皮付きの竹を使用、高度な技術を要する。